

文化 第八十二卷 第三・四号 一秋・冬一 別刷
平成三十一年三月二十九日発行

佐竹保子教授の業績と学風

土屋育子



佐竹保子教授の業績と学風

土屋 育子

佐竹保子教授は、二〇一九年三月末日に、定年により東北大学をご退職される。

先生は、山形県鶴岡市のご出身で、東北大学文学部、同大学院文学研究科で学ばれたあと、一九八三年四月に東北学院大学教養部の助手となられた。講師、助教授を経て、九二年三月に同大学を退職、同年四月に鳴門教育大学学校教育学部へ転任された。二〇〇〇年四月、東北大学院文学研究科にご着任、〇六年四月に教授に昇進され、今日に至っている。

先生のご専門は、中国の三世紀半ばから五世紀半ばにかけての六朝時代、当時の文学者たちが綴った韻文学である。最初の公刊論文は、「鍾嶸「詩品」の選評に内在する文学的価値基準」（『集刊東洋学』第四十号、一九七八）である。本論文からは、その後の

先生のご研究を貫く姿勢の萌芽を、十二分にうかがうことができる。南朝梁代の批評家鍾嶸（しょうこう、四六九頃～五一八頃）が著した、文学批評書『詩品』を組上に載せ、その特異な評価基準を、正確無比な本文読解とそれに基づく精緻な分析によって、鮮やかに説明してみせた佳品である。院生らしい初々しさを感じさせつつも、その精緻な分析には熟練した職人の趣きがあり、堂々たる風格すら備えている。

先生は、中国文学のみならず、中国思想の分野についても深い学識をお持ちである。六朝時代における文学と老荘哲学や仏教思想との融合についてまとめられた名著『西晋文学論——玄学の影と形似の曙——』（汲古書院、二〇〇二）には、文学・思想双方を自家菜籠中のものとされている専門家としての面目躍如たる感がある。先生がそもそも文学・思想を隔てなく学

ばれているのは、志村良治先生、中嶋隆藏先生を初めとする先生の師が、文史哲の枠組みにとらわれない研究業績をお持ちの研究者であることと、決して無関係ではないであろう。

全六章約四五〇頁におよぶ大著である本書では、西晋時代（二六五〜三一六）を生きた六人の文学者とその作品を取り上げている。このように書くと、作家論を並べたものなのかと思われる向きもあるかもしれないが、その見方は正しくない。本書には二つの書評があるが、ここでは柳川順子氏による書評（『集刊東洋学』第九十三号、二〇〇五）を参照しつつ、本書のねらいを著者の意図に即して紹介してみよう。

西晋文学といえば、潘岳・陸機という二名の文学者を中心に論じられるのが従来研究の主流であった。先生は、この両者をその時代の突出した存在と位置づける。西晋文学は、玄学の影響を濃厚に受けた魏（二二〇〜二六五）の正始文学と、東晋（三一八〜四一九）文学の中間に位置するが、潘岳・陸機の文学には、玄学の影響を顕著にみとめられない（玄学とは、『易』『老子』『莊子』を主潮とする思想を指す）。また、西晋に続く東晋の詩の後、老荘に思想的な背景をもつ山水詩が登場するが、この流れに繋がる要素をも、かの二人の文学には見いだしがたい。

しかし、当時の思想界で盛行していた玄学が、文学の分野に浸透しなかったのか。また、この時代には「形似の言」（形似とは、対象そのままに具体的に細やかに描く手法）をよくすると称された張協が現れ、その作品が後世の山水詩に継承されていくが、当時において張協の表現手法は突然変異的な例外であったのか。この問題を提起した上で、先生は次のように喝破される。そうではなく、西晋文学を語る時、潘岳・陸機に集中するゆえ、玄学・形似の跡を多く発見できないのである。他の文学者に目を向け、詩以外の文学ジャンルにまで拡げるならば、玄学の影響、形似の手法はそこに確かに見出しうる、と。

そこで浮上するのが、先述の六人の文学者、皇甫謐、夏侯湛、張華、束皙、張協、郭璞なのである。先生は、これまであまり顧みられることが少なかった作品をも含め、彼らの文学から前後の時代に繋がる要素を、丹念に掬い取ろうと試みておられる。

評者柳川氏は本書に対し、次のような賛辞を贈られている。「著者は、旧来の作家研究に訣別し、他方、文学作品を作家の個性に回帰させない近來の研究方法からも、ためらいがちに自立しようとしている。この逡巡の中に、文学論を志す者としての誠意を感じ取り、深い共感を覚える読者も少なくないのではあるまい

か」。本書における試みは、先生の中国文学研究を牽引する者の鑑たらんとする意志の表れであった。研究方法に関して付言すれば、個人の伝記が断片的な曖昧さを残す時代の文学ゆえ、むしろ、作家研究より作品そのものに向き合う研究方法のほうが相性がよいはずである。先生の研究に対する目が、非常に透徹したものであることは、このことから明らかであろう。

先生の分析が緻密であるのは、的確な読みによる堅固な下支えがあるからである。あえて誤解を恐れずに言えば、先生の論文の魅力は、作品自体が持つ玉を鋭く見出し磨き上げて、我々の前に示してくれるところにあるように思われる。やや長くなるが、本書から張協の「安石榴賦」の末尾について、訳文とその分析を引用してみよう。

爰採爰収　そこで摘んで籠に入れ

乃剖乃折　さて割って裂けば

内憐幽以含紫　内はゆかしく紫を含み

外滴瀝以霞赤　外はつゆがしたり赤に霞む

柔膚水潔　柔らかな肌は水の清らかさ

凝光玉瑩　こごった光は玉のかがやき

濯如水碎　くずれば水が碎けるよう

泣若珠迸　したたれば真珠がほとばしるよう

含清冷之温潤　清涼さを口にふくめば温かく潤い
信和神以理性　まことに心を和らげ性をととのえてくれる

中が紫がかり、表面が赤に染まる微妙な色合いから始まり、もろくはかない清らかさ、かすかに光を帯びた半透明感、果汁が真珠のようにほとばしり滴るみずみずしさ、はては、ひんやりした果肉が口の中で温かく潤っていく食感に至るまで、賦は描き尽くす。(中略) 少なくともこれは、直接的に女性を連想させはしない。むしろ女性の描出を介さず、ざくろの果実そのものを注視し、それ自体の魅力を言葉にしようとしている。限られた対象へのこの吸い寄せられるような没入と、既成の像や典故に寄りかかりすぎない細やかな描出こそ、「形似」と呼ばれる手法の一端を示すものだろう。

流麗な訳文と、詩の含意を余す所なく掬い取った分析は、これぞ佐竹先生の真骨頂を示すものである。

大著をものにされて後、近年では、六朝時代に編まれた文学の総集『文選』に収録される、六朝の悲劇的な詩人謝靈運の詩を中心に、精力的に論文を発表しておられる。その一部を挙げれば、『詩経』から謝靈運詩までの頂真格の修辭——押韻句を跨ぐもの』（『東北

大学中国語学文学論集』第十九号、二〇一四)、「同韻の二聯間における頂真格の修辭——『詩経』から謝靈運まで——」(『集刊東洋学』第一一四号、二〇一六)、「『乱流趨孤嶼、孤嶼媚中川』の修辭の系譜——同聯内における頂真格」(『六朝學術学会報』第十七集、二〇一六)など、頂真格(上句の末二字を下句の初二字に重ねて用いる技法)というレトリックに着目した研究成果である。この技法は「古詩に常有」として、これまで等閑視されてきたが、先生はこの技法を用いた句を徹底的に調べ上げ、その意味と効果を鮮やかに解明されている。ここにも、一字一句余さず、すべて掬い取らんとする、一種の執念ともいべき氣迫が通底している。

先生の代表的な訳業としては、なんといっても『詩の芸術性とはなにか』(汲古書院、一九九三)を挙げないわけにはいくまい。本書は、北京大学教授袁行霈氏の名著『中国詩歌芸術研究』の前半部分の翻訳である。本書の出版に至る経緯から、若き日の先生を様子をうかがうことができる。袁教授は、「日本語版自序」で、次のように述べる。袁教授にとって佐竹先生は最初に出会った日本人研究者であり、日本人の研究者の第一印象は先生から得ている。一九八一年秋に指導教官になり、講義の前後の交流で理解と友情を深め

た。翌年四月、袁教授は東京大学に招かれ、それに先立って先生から日本語の手ほどきを受けた。佐竹先生の帰国後も交流は続き、論文の抜き刷りも送られてきたと述べた後、袁教授は佐竹先生についてこう記す。「彼女には博綜と簡要の両方の長所があるように思われた」。この一文は、袁氏からの最大の賛辭に違いない。

先生の業績としてもう一つ挙げるべきは、魯迅に関わるお仕事である。院生のとき、『仙台における魯迅の記録』(平凡社、一九七八)の共編著に名を連ねられた。先生がご担当なさったのは、第三章「在学時代の周樹人」の「三 下宿と日常生活」である。この章では所謂「髭の写真」とその発見の経緯が記されている。詳しくは本書を参照されたいが、「髭の写真」とは、魯迅ほか五名の下宿生が写り、のちに墨でそれぞれ鼻の下に髭が書き込まれた写真のことである。この写真の発見によって、魯迅以外のもう一人の清国人留学生の存在が判明したのであるが、発見の報からメンバーが駆けつけるくんだり、当時の息遣いが伝わり、読む者を飽きさせない。

この他にも、「李清照と趙明誠」(『人文社会科学講演シリーズVI 男と女の文化史』東北大学出版会、二〇一三)は、「中国の文学と女性」(『中国ジェン

「ダー史研究入門」京都大学学術出版会、二〇一八）
といった、中国文学におけるジェンダーに関する文
章や、『杜甫全詩訳注（二）』（講談社、二〇一六）と
いった訳注も記憶に新しい。

佐竹先生のお人柄について、いささか記すことにし
たい。

佐竹先生は大変仕事の早い方である。論文のチェッ
ク、推薦書等、依頼のその日或いは数日中に仕上げら
れるのを何度も目にしてきた。私はずっと、これは佐
竹先生の気質に帰するものだとはばかり考えていた。と
ころが、今回小稿を書くにあたり、先生ご執筆の「花
登先生のご学風と業績」を読む機会を得、その中の一
文に目がとまった。それは、花登先生のお人柄を記
す、次の一文である。「締切の一ヶ月前には完成させる
という驚異的な仕事の速さとの確さ、それとなぜか両
立している、対象の美点（それがいかに些細でも）を
逸早く見抜くふところの深さとそれと表裏をなす骨の
髄からの謙虚さ」。おそらくこれは、中文研究室の教員
として、脈々と受け継がれてきた気質で、先生はそれ
を忠実に受け継いでこられたのであろう。

先生らしさを感じるエピソードもご紹介したい。専
攻分野の教員、院生全員参加する「中国語学中国文学
研究演習」という授業がある。来年度分からシラバス

作成を筆者が担当することになったので、前年度のシ
ラバスを参照することにした。予想に違わず日本語と
英語が几帳面に並記されており、ただただ感服、恐れ
入りながら順に読んでいくと、「授業の目的と概要」
欄だけ、日本語と英語とが一致しないことに気がつい
た。そこには次のようにあった。

“Gather the techniques that serve your dreams,
create techniques to serve your dreams !” by Chick
Corea.

先生が授業等で直接このメッセージに言及されたこ
とはなく、この一文に気がついた者はほとんどいない
のではあるまいか。それを承知で、中文の学部生、院
生、所属する者すべてに向けて、メッセージをお贈り
くださっていたのである。ふだんなかなか本心をお見
せにならない先生の、先生らしいやり方である。

中国学三研究室で、年度の初めに作成している有
志の名簿に、佐竹先生は毎回、「抱負は逍遙／趣味は
彷徨」と書いていらっしやる。先生のこれまでのご指
導に感謝申し上げるとともに、先生がこの言葉のよう
に、軽やかに自由に、益々ご活躍なさることを、心か
らお祈りする次第である。